

情報リテラシー教育

～情報リテラシー教育の再構築にむけて～

島根大学附属図書館
情報サービスグループ 昌子喜信

第3回 中国・四国・九州・沖縄地区大学図書館職員
フレッシュバージョンセミナー
2009.9.18

1

アウトライン

- 見取り図
- 実施状況
- 課題
- 教育改革からの要請
- 先行モデル
- 方向性・可能性
- 島根大学での取組

2

「情報リテラシー」の定義(1)

(ALA Presidential Committee on Information Literacy. Final Report. ALA, 1989.)

- 情報が必要なとき、それを認識し、効果的に発見、評価、利用する能力

(日本図書館協会図書館利用教育委員会. 1999)

- 情報探索法・整理法・表現法などを含む総合的な情報活用能力。コンピュータ利用能力だけでなく、情報の評価および情報倫理の理解も含めて、あらゆる情報の活用が可能な能力をいう。図書館利用能力も大きな部分を占める。

3

「情報リテラシー」の定義(2)

(ACRL. 高等教育のための情報リテラシー能力基準.2000)

- 情報リテラシーは、情報テクノロジーを使いこなす技能とかなり重なるところが多いが、それとは区別される、より広範な領域に及ぶ能力である。情報テクノロジーを使いこなす技能は、ますます情報リテラシーに組み込まれて、また情報リテラシーを支えるものとなっている。
- 情報リテラシーは、テクノロジーを用いることもあるが、最終的にはそれに依存しない能力を通して、生涯学習を開始し、継続し、発展させる。

4

情報リテラシー教育の見取り図

情報(活用)スキル

- ・情報を客観的に評価する能力
- ・情報を整理する能力
- ・情報を活用(表現)する能力
 - プレゼンテーション
 - レポート・論文作成

ITスキル

- ・コンピュータの基本的な利用能力
- ・ネットワークの基本的な利用能力
- ・標準的ソフトウェアの利用能力
- ・情報セキュリティの基本知識
- ・ネットワーク倫理・マナーの基本知識

図書館(利用)スキル

- ・図書館(や所蔵資料)の基本的な利用能力
- ・文献探索と文献の入手方法についての基本的な知識と能力
 - データベース利用法
 - ILLサービスの使い方

5

2とおりの情報リテラシー教育

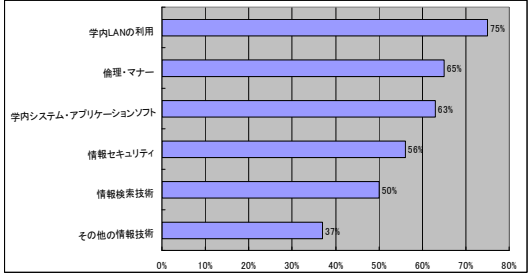
- 「情報リテラシー」概念が複数存在
 - 1) ITスキルを中心としたもの
 - 2) 図書館スキルを中心としたもの
- 「情報リテラシー教育」の教育目標や内容が実施主体によりまちまち

6

全国での実施状況(1)

文部科学省.平成19年度学術情報基盤実態調査報告(2001.3)

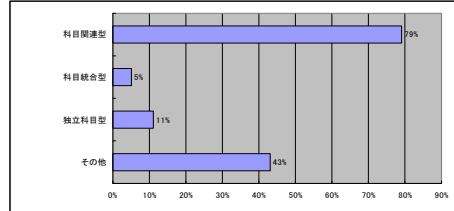
- (1)情報リテラシー教育を実施している大学 93.6%(699大学)
- (2)「情報リテラシー教育」の実施内容



全国での実施状況(2)

今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館)報告書(2007.3)
(*調査時点は2006.12)

- (1)「情報リテラシー教育」に関する授業を実施している大学 73.4%
- (2)「情報リテラシー教育」の授業への図書館員の関わり方

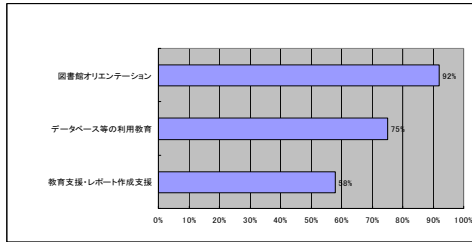


全国での実施状況(2)

今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館)報告書(2007.3)

- (3)図書館が実施する情報リテラシー教育

①実施率

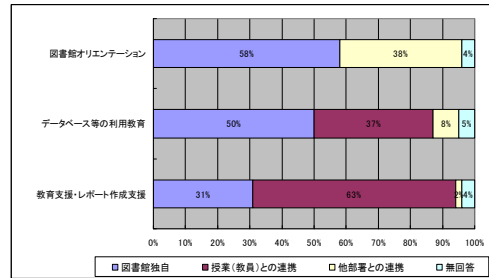


全国での実施状況(2)

今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館)報告書.2007.3

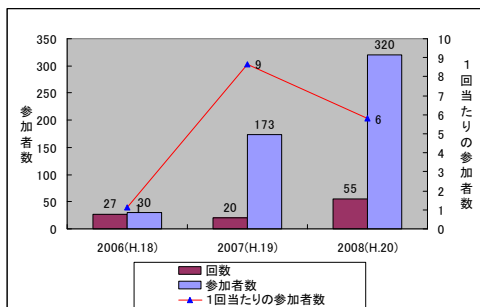
- (3)図書館が実施する情報リテラシー教育

②実施形態



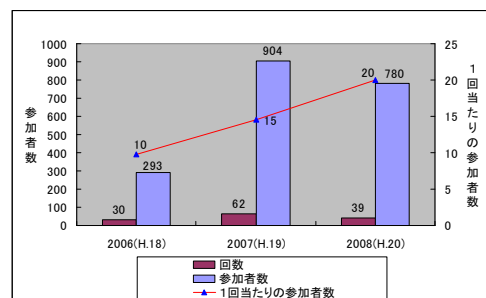
大学での実施状況 ~ 島根大学(1)

- (1)図書館主催講習会



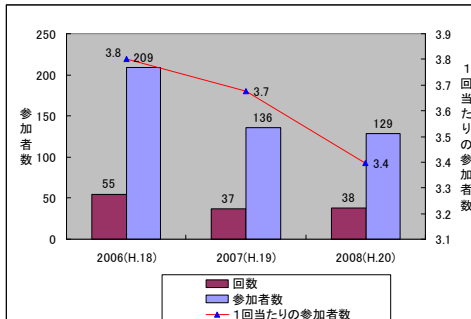
大学での実施状況 ~ 島根大学(2)

- (2)科目関連指導(オンデマンド講習)



大学での実施状況 ～ M大学(1)

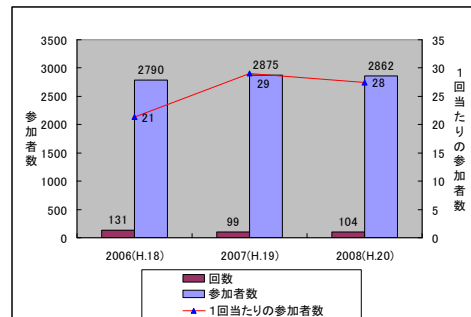
(1) 図書館主催講習会



13

大学での実施状況 ～ M大学(2)

(2) 科目関連指導



14

見えてきた課題

- 図書館主催の文献検索講習会
→ 受講者数の頭打ち
- 授業中での実施(科目関連・科目統合・独立科目)
→ 学生の動機付けの弱さから効果が上がらない。

15

課題に対する試み(1)

- (1) レポート作成を起点とした情報リテラシー教育(米澤, 2007)
- 「従来の図書館利用教育で中心的な役割を果たしていたのは、「情報探索(検索)講習会」である。その取り扱う範囲は「情報源の選択」と「情報源の探索」の部分であり、多くの場合はまずそこから順をおって説明している。このような情報探索中心の講習会単独で、受講者数を増加させることは困難な状況になってきている。」
- 「基礎科目などの中のコマに組み込む形をとったにせよ、学生の意欲と興味が低いために、情報リテラシー教育の効果が高まらないという問題がでてきている。」

16

課題に対する試み(2)

(2) 三重大「情報科学基礎」(全学必修科目)
(杉田, 2005)

- 情報検索入門、レポートの書き方入門の2コマを組み込む
- 「情報検索入門は、アンケートの結果、満足度は高いが、講習会後の活用度は高くないという実態が明らかになったため、レポートの書き方入門を新設し、情報検索入門と合わせて2コマコースとした」

17

教育改革からの要請

～大学審議会等の答申をみる(1)

(主に長澤, 2002)

- (1) 「高等教育の一層の改善について」(1997.12)
 - 詳細な授業計画を示したり、準備学習の指示を与えるシラバスの役割が重要であるとし、履修科目の一覧に終わらないシラバスの作成を求める。
 - 1単位あたり45時間の学習を必要とする単位制度を実質化するために、課題レポートを与え、教室外学習の指導を工夫し、図書館など施設設備の利用面から学習環境を整備することが望ましい。
- (2) 「21世紀の大学像と今後の改善方策について」(1998.10)
 - 教室外学習を徹底させるために、シラバスに読むべき文献を指示したり、図書館等の学習環境を整備するなど、学習の補助手段を十分活用することが重要である。

18

教育改革からの要請

～大学審議会の答申をみる(2)～

(3)「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」(2000.11)

- 情報リテラシーがグローバル時代に不可欠の能力であるとして、学生が「主体的に情報を収集し、分析し、判断し、創作し、発信する能力」を育成する教育のあり方を検討することを求めている。

(4)「学士課程教育の構築に向けて」(2008.3)
(中央教育審議会大学分科会)

- 我が国の学生の学内外を通じた学習時間(1日平均)は3時間余り(2006年総務省調査)であり、我が国の大学生の学習時間の短さは顕著。こうした実態は、単位制度の趣旨を踏まえたものとはなっていない。
- シラバスについては、「準備学習等についての具体的な指示」を盛り込んでいる大学は約半数にとどまっており、学生が必要な準備学習等を行ったり、教員がこれを前提とした授業を実施する環境となっていないことを懸念。
- 今後、国際通用性の観点から、学習時間の実態を国際的に遜色ない水準にしていこうと目指して、総合的な取組を進めていく必要がある。



答申から読み取れること

- 授業改革を進め、単位制度を実質化させるための教室外学習を有効にするための工夫を教員や教育現場に求めている。

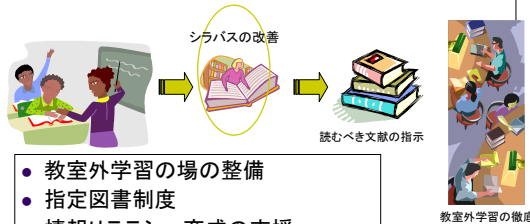
→図書館の学習環境の整備

→シラバスの改善と有効活用

→情報リテラシーの育成支援



図書館にできることは？



- 教室外学習の場の整備
- 指定図書制度
- 情報リテラシー育成の支援

授業改革の中に、図書館が授業(カリキュラム)と連携してより本質的に学生の情報リテラシーの育成支援を行える鍵があるのでは？



先行するモデル

「研究調査法」(1) (大阪女学院短期大学)

(丸本, 2000)

- 独立学科目として情報リテラシー育成を目指す「研究調査法」を1年次全学生の必修とする
- 授業の目標
 - 1) 在学中に必要な基本的リサーチ・テクニックを身につけること
 - 2) 卒業後の生涯学習に必要な情報の入手手段の基礎を習得すること。



先行するモデル

「研究調査法」(2) (大阪女学院短期大学)

- 主体的学習の動機付けをし、明確な情報要求を持たせる手段として自分で選んだテーマで小論文を書かせる。論文執筆のプロセスで、学生はコンピュータ利用、様々な媒体の情報の探索・収集・評価、自己決定、新しい情報の再構築、などを体験する。
- 従来の図書館利用教育が目指してきた図書館利用の枠を越え、またいわゆる情報教育が指すコンピュータ・スキルの育成に偏ることなく、情報活用の一連の流れ - 情報要求の認識、収集、選択、整理、統合、伝達、発信 - の各プロセスを含むものとなっている。
- 研究調査法は有機的に他の教科の学習と統合されている。研究調査法で学習することは、あくまで基礎段階であり、情報リテラシーの定着に必要な実践の場が他の教科の授業で提供されている。



今後の方向性・可能性

- 大学全体で、図書館リテラシーを含む「情報リテラシー教育」をカリキュラムとして構築していくこと
- 授業の主題に関連づけた情報リテラシー教育を授業の中に取り込むこと



- 大学の「高等教育開発センター」などとの連携が不可欠
→これまでの図書館の活動や実績を積極的にアピールすることが重要



島根大学での取り組み(1)

～情報副読本『学術情報リテラシー』の編集・発行

- 大学の情報部門(総合情報処理センター)、教育開発センター、図書館の3者の協働により情報教育の副読本として作成
- 本学の情報教育には、全学で統一された基準・ガイドラインがなく、各学部で開講される情報教育は内容がまちまち。このため、『学術情報リテラシー』は情報教育のテキストではなく、副読本として作成
- 情報教育の全学で統一されたガイドラインをつくることの必要性
→ 図書館リテラシーを内容として含む「情報リテラシー」の統一カリキュラムの可能性も

25

島根大学での取り組み(2)

～初年次教育との連携

- 初年次教育(導入教育)の中で、大学生活に必要なアカデミック・スキルの一つとしての情報リテラシーを育成するために、図書館から働きかけ
- 本学の初年次教育は専門教育を基礎とするため、授業の主題に関連した情報リテラシー教育の可能性も
- 初年次教育の授業に関連した指定図書を図書館に設置する方向で検討開始

26

最後に

- 大学図書館は大学の一部、大学でどのような教育が行われているかを知ることは、情報リテラシー教育支援や学生用図書の整備など、学生に対する図書館サービスの基本となる。

27

参考文献

- 米澤誠. レポート作成を起点とした情報リテラシー教育の試み. 医学図書館. 2007, 54(2)
- 杉田いずみほか. ニッチ戦略で大学教育に貢献できる情報リテラシー教育支援を目指す: 三重大学附属図書館の取組に見る7つのポイント. 東海地区大学図書館協議会誌. 2005, 51
- 丸本郁子. 情報リテラシー教育の評価: 大学基礎教科目として何ができるか. 大阪女学院短期大学紀要. 2000, 30
- 長澤多代. 大学授業改革に求められる大学図書館の役割: 大学審議会答申における授業と図書館を中心に. 日本図書館情報学会誌. 2002, 48(3)

28